

令和3年度第2学期終業式式辞（放送）

穎明館生の皆さん、おはようございます。2学期終業の日、けじめの日です。皆さんの2学期はどうでしたか。学習への取り組み、生活態度、そして文化祭・体育祭、クラブ活動への貢献等、客観的な成績・数字をふまえつつ、冷静に自己評価を下してみてください。今後に向けて先生方からの指導、アドバイスを活かしていくことも大事です。謙虚に、素直に受けとめて前進、成長しましょう。

2学期、そして2021年を振り返ると、どうしてもコロナ禍で暗く、重々しい気持ちになります。その中で行われた東京オリンピック・パラリンピックは、生徒の皆さんにはどう映ったでしょうか。1年延期や無観客と異例づくめながら、開催国の責任を負い、世界的なスポーツの祭典が行われたことに、私には感慨深いものがあります。今回は、直前までその開催の是非や実施の在り方について、さまざまに論議されてきました。おそらく代表選手たちは、とても大きな不安を抱えていたことでしょう。

例えば、難病から競技復帰した競泳女子の池江璃花子選手には、「会場が輝いて見えた」と言います。海外からの参加者を含め、選手たちは競技の場に立てたことの喜びと開催への感謝を、インタビューなどで次々と口にしていました。「ありがとう」の言葉が心に響きました。

柔道男子、大野将平選手が決勝戦の死闘の後、絞り出すように語った言葉、「開催の賛否両論は理解しています。ですが、我々アスリートの姿を見て、何か心が動く瞬間があれば、本当に光栄に思います」。この謙虚で矜持に満ちた言葉に、東京オリンピックが救われたという気持ちになりました。

選手とともに、準備・運営に関わった多くの関係者に改めて深く敬意を表したいと思います。コロナ禍にあっても、目標に向かって協力し連帯すれば、大きな困難を乗り越えられるというメッセージを世界に発信した大会になりました。

一方、パラリンピックでは、様々な障害があるアスリートたちの限界に挑む姿があり、現代社会の重要な課題である、多様性を認め合い、共に生きる「共生社会」を実現するヒントが数多く含まれていました。競技では、14歳でパラリン

ピック史上、最年少のメダリストになった競泳の山田美幸選手が印象に残りました。両腕がなく、両脚の長さが異なる山田選手はキックだけではまっすぐに進めないため、肩周辺の筋肉を回転させて姿勢を保ち、頭の向きを微妙にずらして体の傾きを修正しているそうです。水泳を始めたのは5歳で、「お風呂でおぼれないようにするため」。そして2016年のリオ大会を見て猛特訓を始めたとのこと。インタビューでは、「水泳をしていなければ経験できない夏休み、最高の思い出になりました。夢は外交官になることです」と語りました。障害に打ち克つその姿に無限の可能性を感じます。

アスリートの活躍を見て、率直に「すごいな」と感じるとき、私が思い出す言葉は、「精神一到何事か成らざらん」です。精神を集中して努力すれば、どんなことでも成し遂げられないことはない。今回、とくにパラアスリートの活躍を見るにつけ、障害や困難に負けず、果敢に挑戦する尊さ、あきらめない強い意志が伝わってきました。時に人は困難や問題に直面すると、「無理だよ」とか、「できないよ」と、ついつい否定的な発言をしてしまいがちです。私にも覚えがあります。すぐに「ハンデを負っている人の頑張りに比べれば、自分の努力はまだまだ足りない」と思い直します。「精神一到何事か成らざらん」——強い意志で人生を歩むために大きな力を与えてくれる言葉です。

穎明館生の皆さん、皆さんのなかに「頑張っているのに成果が出ない」とか、「自分にはもともと才能がない」などと嘆いている人はいませんか。そんな人たちには「精神一到何事か成らざらん」の言葉を贈ります。努力しよう。とことん努力しよう。努力の先には夢中がある。努力を努力と思わないくらい、夢中になるまで頑張ってみよう。さて6年生、第35期生の皆さん、受験勉強追い込みの時期、誰もがつらい時期です。精神一到何事か成らざらん——ここからが本当の勝負です。自分に負けるな。克己心をもって乗り越え、成し遂げてください。

今日は、2学期の終了にあたり、東京オリンピック・パラリンピックから私が受け取ったメッセージについてお話ししました。

風邪、インフルエンザ、そしてコロナ感染症にくれぐれも気を付けて、2022年、3学期始業式にまた元気に会いたいと思います。よい新年を迎えてください。

以上、令和3年度穎明館中学高等学校第2学期終業式の式辞と致します。